

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金 成根

本論文は、19世紀東アジア、とりわけ朝鮮と日本の自然観の変容とそれに伴う科学概念の転換を比較史的に論じた野心的な極めてすぐれた研究である。

19世紀は、欧米列強が近代科学技術力を利用して、中国、朝鮮、日本への進出をはかった時代であった。18世紀までの東アジア三国は中国の衛生文明として統一した自然観・学問観を有していたと言ってよかった。ところが19世紀になると中国は阿片戦争によって英国の軍事的侵略の対象となった。そのような衝撃を受けても、朝鮮は中国以上に、朱子学的学問伝統を、その内部での改革を試みながらも保持し続けた。他方、日本は幕末・明治維新期に朱子学的学問体系を遺棄し、西欧近代的科学技術の体系的導入をはかった。本論文は、近代日本の機械論的自然像、西欧軍事技術の導入が伝統的自然観を守った朝鮮よりも必ずしも勝っていたわけではなかったことを、日本と朝鮮の自然観・科学観を多面的に比較しながら緻密な文献考証に基づいて、主張している。

本論文は朝鮮学問の第Ⅰ部と日本学問に関する第Ⅱ部とからなる。第Ⅰ部では朱子学の気学的自然観を概説したあと、朝鮮儒学者金正浩（キムジョンホ）の風水思想を利用しての地理学について論じ、さらに崔漢綺（チェハンギ）の体系的気学思想を紹介している。その後、欧米列強の軍事的脅威が朝鮮に及ぼした影響を包括的に論じたあと、儒学者による気学思想の医学への応用を紹介している。総じて、近代朝鮮が伝統的儒学の枠組みの内部で漸進的近代化を試みていたことを確認している。

近代朝鮮と対照的な学問的転換を図ったのが幕末明治初期日本であった。それが第Ⅱ部が取り組む問題であり、まず、徳川体制における朱子学と連携した自然概念を概説したあと、幕末・明治維新期の社会変動に言及する。さらに、明治初期の日本で西洋学術用語の多くを確定するために尽力した西周による「心理」から独立した「物理」概念の形成、西洋の 'nature' に対応する「自然」概念の成立があとづけられる。最後に、「物理」や「自然」が伝統的漢語＝日本語を換骨脱胎する形で、西欧近代の機械論的自然観に適合的な語彙として定着する有り様を叙述している。

しかし、近代日本に定着したような近代西欧的自然概念はけっして自然科学思想にとって普遍的なものとは言えず、朝鮮のように、風水的地理観を保持し、漢医学を発展させた近代自然科学も有りえたことを金氏は結論として主張している。

本論文の独創的貢献をもっと個別的に述べれば、以下のとおりである。

(1) 19世紀朝鮮の朱子学的自然哲学の世界の科学史における歴史的意義を幾人かの儒学知識人に沿って闡明したこと。

(2) 幕末・明治初期の西周を中心とする学者による西欧近代科学の諸概念に対応する漢語の確定を緻密に成し遂げたこと。

(3) 19世紀朝鮮と日本の西欧近代自然科学の受容の仕方の相違を、必ずしも近代日本を理想化することなく、比較史的に論じたこと。

本論文は、近代朝鮮と日本の自然科学的基礎概念を予断なく、文献史的に比較しえた斬新さにおいて際立っている。日本の伝統的自然観として国学の影響に言及すべきだという意見もあったが、それは改訂版に取り入れることによって補訂できる。審査委員全員は、本論文をもって学位取得のために十分であると判断した。本論文は、金氏が日本と韓国を繋ぐ包括的科学思想史家であることを示した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。